

「千年王国」の役割に関する考察 及び クリスチャンとの関わり

キリストが再臨されて「裁き」がなされた後、来るべき輝かしい「千年王国」の幕開けとなるとされています。

さて、その「千年王国」とはそもそもどういうものなのでしょうか。

この期間が設けられる理由は、アダムゆえに罪を負うものとなった人類を本来の創造された当初の完全な人に戻す、言わばリハビリテーションの役割を果たすものです。

聖書中に示されているアダム以来の系図やキリストの生誕の年代などを考慮すると、現代までにおよそ6千年が経過していると見ることができます。

つまりアダムからBC(ビフォアクライスト)の期間が4千年+AD(アノドミノ)以降2千年で、合計するとおよそ6千年ということです。

神のカレンダーの単位は「7」というモジュールで構成されることを考えますと、残り1千年を持って、全体で7千年というのが、神の創造の1日に相当するのでしょうか。

それで、「千年王国」は、神の創造の7日目の「休日」の期間中の更にその1/7に当たると言えます。

「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された。

それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。

神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。- 創世記 2:1-3

神は6日をかけて万物を創造され、人間の誕生をもって、創造の業の休みに入られ、本来ならば、「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常によかった。」(1:31)とあるように、神はその休みの間、増えてゆく人間とのコミュニケーションを存分に楽しめる予定だったはずですが。

それが、サタンにより頓挫してしまっただけでなく、直ちに「女の胤(メシア)」による救済計画を發布されましたが、神は、7千年かけて人類を世話し、教え、導くことを1/7の1千年で、行われ、「神の休み」の最終時点では当初の予定通りの事柄をなし終えられ、サタンのしでかしたすべての爪痕を、まるでなかったことのように、整えられる。それが「千年王国」の目的と言って良いでしょう。

その救済手段についてですが、地に遣わされ、贖いを成し遂げられたイエスのその贖罪は、その後、放って置いてもシステムとして自動的に適用されるのではなく、個々人に対して手厚く施される介護によってもたらされるものようです。

というのは、先に「神の休み」の最終時点では「当初の予定通りの事柄をなし終えられる」と書きましたが、そのための具体的な方法として計画されたのが、まず、アブラハムを選び、次のような契約を交わされたことから分かります。

「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」- 創世記 12:3

「あなた」とは(アブラハムの子孫)つまり生来のイスラエル人です。

もちろんその祝福の経路となる主要な方はイエス・キリストですが、このゆえにこそ、イスラエルに律法が与えられ、聖別されることとなります。

「あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。」- 出エジプト 19:6

この契約に関わっているのは、神とアブラハム（+ その子孫）だけではありません。そもそも、この契約締結の目的、理由は「地上のすべての民族」の祝福に他なりません。一国すべてが祭司となるわけですから相当な人数です。なぜなら、その対象は歴史上存在したほとんどの人類全員だからです。膨大な人数のケア要員が準備されたということです。

しかし、イスラエル人はその踏み外しのために「祝福の経路」となる立場から失格し、代替策として、異邦諸国民から、「アブラハムの胤」を選ぶことになりました。まさにそれが「クリスチャン」の存在理由です。「救い」とか「永遠の命」とか「召し」とか「天国に迎えられる」などのクリスチャンに関わる一切の約束は、何のためでしょうか。もちろん、その役割を受け継ぐクリスチャンがまず救われる必要があります。しかしそれは、クリスチャン当人のためではなく「地上のすべての民族」を祝福するという神のご計画の実現のためです。クリスチャンは、キリストと共に人々を救う側の構成員として天に募集されているのです。

そういうわけで、クリスチャンは、「地上のすべての民族」を祝福するために「王、また祭司」として働くということです。

「私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」 - 黙示 5:10

「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」 - 黙示 20:6

ではその「千年王国」の治める側ではなく、治められる地上、祭司の働きを受ける側の人々に注目してみたいと思います。

そこにいるのは、つまり、ハルマゲドン後、生き残った人々とはどのような人たちなのでしょう。聖書の記述そしてそこに使用されている語句をみると、「地の王たち」ならびに「諸国民」と言われる人たちであることが分かります。

「都には、これを照らす太陽も月もいらない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

諸国の民 $\xi\theta\nu\eta$ が、都の光によって歩み、地の王たち $\beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\iota\varsigma\ \tau\eta\varsigma\ \gamma\eta\varsigma$ はその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。こうして、人々は諸国の民 $\xi\theta\nu\omega\nu$ の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。」 - 黙示 21:23-26

「川の兩岸には、いのちの木があつて、十二種の実がなり、毎月、実ができた。また、その木の葉は諸国の民 $\xi\theta\nu\eta$ をいやした。」 - 黙示 22:2

ここに出てくる「地の王たち」「諸国の民」は聖書中に頻繁に出て来るものであり、黙示 22章以降だけ同じ語を全く違う意味に捕らえる根拠はありません。

従って、素直に聖書を読み、「書かれていることを超え」ない読み方とは、ハルマゲドン後もこれまでと同じように「地の王たち」「諸国の民」は存在すると言うものであり、「地の王たち（複数形）がいるということは「諸国」があるということで、当然そこにそれぞれ

の国民が存在します。

「ハルマゲドンでクリスチャン以外すべて滅ぼされる」というようなことを聞いてこられた方は、ご自分の理解の方を調整しなければならないことは明白でしょう。

両立しない以上、聖書を探り、伝統的な見解を捨てるのがクリスチャンの取るべき姿勢です。

そして、この見解を支持する根拠として一層明らかなのが次の聖句です。

「底なしの淵に投げ入れ、鍵をかけ、その上に封印を施して、千年が終わるまで、もうそれ以上、諸国の民を惑わさないようにした。その後で、竜はしばらくの間、解放されるはずである。」 - 黙示 20:3

「もうそれ以上」と訳されているのは「ギ語：エティ」で「に加えて、さらに、依然として」という意味であるとされています。

これはすなわち、「サタンを閉じ込め、封印する」理由はそれまで惑わしていた「諸国民」をその後の千年間も引き続き惑わすことになってしまうから、ということです。つまり千年間そこにいるのは「依然として」「諸国民」であるということであり、それまでずっと惑わしてきた、同じ「諸国民」であるということです。

この千年王国の住人については、イザヤ書やミカ書などからも確認できます。

ここでは、ミカ書から引用してみましょう。

「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、**国々の民**はそこに流れて来る。

多くの異邦の民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコフの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。

主は**多くの国々の民**の間をさばき、**遠く離れた強い国々**に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、**国は国に向かって**剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。

彼らはみな、おのおの自分のぶどうの木の下や、いちじくの木の下にすわり、彼らを脅かす者はいない。まことに、万軍の主の御口が告げられる。

まことに、**すべての国々の民は、おのおの自分の神の名**によって歩む。しかし、私たちは、世々限りなく、私たちの神、主の御名によって歩もう。

その日、――主の御告げ。――わたしは足のなえた者を集め、追いやられた者、また、わたしが苦しめた者を寄せ集める。

わたしは足なえを、残りの者とし、遠くへ移された者を、強い国民とする。主はシオンの山で、今よりとこしえまで、彼らの王となる。

羊の群れのやぐら、シオンの娘の丘よ。あなたに、以前の主権、エルサレムの娘の王国が帰って来る。」ミカ 4:1-8

冒頭の「終わりの日」というのは、ヘ語：「アカーリース ヨーム」で「in Latter / the days」で「最終、後世、端部」などの意味を持つ語で、「千年期」を指すと考えられます。

終末期の裁きの日については、旧約では一貫して「主 (YHWH) の日」と表現されています。

実際、ハルマゲドンに至る終末期は、王たちが神に戦いを挑むときであり、「剣を挙げず、戦いを学ばない」とは正反対の行動を取る時です。

ここでは「諸国民」はエルサレムを詣でる様子が描かれていますが、「すべての国々の民は、おのおの自分の神の名によって歩む」と、言われているように、様々な宗教も依然残っていることが分かります。

しかし、回復したエルサレムは、千年期間中、地のモデル国家として注目を集めることになるのでしよう。

それらの「諸国の民」は千年間、キリストの贖いの適用を受け、地から買い取られたクリスチャンからなる「王また祭司」の世話によって、アダム以来の罪から徐々に開放されてゆくと考えられますが、千年後の霊的な状態や、神との関係をどのように保つかということについては個人により大きな開きがあるようです。

「千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され、地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。彼らの数は海への砂のようである。」 - 黙示 20:7,8

この出来事は「千年の終わりに」とあるように、神の休みの日が終了する直前で、次の聖句が成就した時です。

「アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです。おのおのにその順番があります。まず初穂であるキリスト、(磔刑から3日後)次にキリストの再臨のときキリストに属している者です。(第一の復活)
それから(千年王国の)終わりが来ます。-IIコリント 15:22,23

「すべての人が生かされる」順番の最後として、裁きの日を生き残った「諸国民」とその子孫が霊的に「生かされる」とともにそれに加えて次の聖句で預言されていたことが成就する時、文字通り蘇る人々です。

「このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。」
-ヨハネ 5:28

「また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている望みを、神にあって抱いております。」 - 使徒 24:15

「そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。」

「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にある死者を出し、死もハデスも、その中にある死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。 - 黙示 20:5;12-13

これをもって、千年王国の目的は完成します。

ではその後どうなるのでしょうか？ コリントの続きの部分を見てみましょう。

「そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。最後の敵である死も滅ぼされます。

「彼は万物をその足の下に従わせた。」からです。ところで、万物が従わせられた、と言うとき、万物を従わせたその方がそれに含まれていないことは明らかです。

しかし、万物が御子に従うとき、御子自身も、ご自分に万物を従わせた方に従われます。これは、神が、すべてにおいてすべてとなられるためです。-IIコリント 15:24-28

「尊皇攘夷」と「大政奉還」に幾分似た感じの、キリストによるこの出来事により、この時点までで「地の王たち」も自分たちの王権を自らキリストに返納し、結果「諸国」は解体し、「諸国民」はすべて「神王国の国民」になっていることでしょう。

「諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。」黙示 21:24-27

これで、「サタンの頭を砕く」という表現の意味するところである、サタンの業のすべてを無効にする「女の胤」であるメシアとしての役割を完了され、み子ご自身も神に服従されます。

結局、成し遂げられた功績は永遠に残りますが、権能や、特別な立場は恒久的なものではなく、人類救済措置としての臨時的なものと言えます。

これは天の「花嫁」も同様です。

ところで、こうして神の創造の業の第7日目である「休み」が終了するわけですが、神は創造の業を完了したわけではなく「休まれた」だけですから、当然、それから次の創造の月曜日が始まると考えられます。

輝かしい功績を挙げられたみ子、また多大の功労者としてその花嫁は、その後の神のさらなる創造の業と維持、世話など、まったく新たな立場や仕事に与ることになるに違いありません。

話が前後するようですが、注意深く聖書を読みますと、「ハルマゲドン」という語で象徴されるような終末（裁きの日）を経過した、「千年王国」も「見た目」的には現状とさほど大きな違いはないと言えらると思います。

ともかく、千年王国下の地上の生活の実体は、地の王たちや諸国民からなるものであり、大きな違いと言えばサタンの影響のない状態だということです。

そして無論、政治、経済、マスコミなどを牛耳ってきたサタニストによる支配の奴隷状態からは開放されます。

地の住民は天から下ってきた新しいエルサレムに栄光を帰す態度を示しますが、依然地上は諸国に分かれて存在し、人間の支配は続くのでしょうか。しかしおそらく、これまでの歴史上、決して実現しなかった平和で繁栄した生活を営むのであろうと考えられます。その住民は、裁きを生き残った善良な人々（クリスチャンではない）とその子孫からなっています。